

愛知学院大学
第192回モーニングセミナー

樋口一葉生誕150年

～なぜ、一葉文学が愛され続けるのか～

中部大学人文学部日本語日本文化学科
愛知峰子

2022年3月8日

5000

AW015863U

日本銀行券

五千円

日本銀行



5000

AW015863U

国立印刷局製造

樋口一葉

明治5（一八七二・五・二）樋口奈津誕生

明16（11歳）青海学校首席卒業、進学断念

明19（14歳）萩の舎入門

（書道、和歌・和文を学ぶ）

明20（15歳）長兄泉太郎病没。

明22（17歳）父則義、事業失敗、病没。

渋谷三郎婚約破棄。

明24（19歳）小説家を志し、半井桃水に入門

明25（20歳）

「闇桜」を同人誌『武蔵野』創刊号に掲載

明26（21歳）

竜泉寺町に転居・駄菓子店開店（7・20）

明27（22歳）

竜泉寺町の駄菓子店、閉店（3・26）

丸山福山町に転居（5・1）



明28（23歳）「たけくらべ」『文学界』に連載開始

明29（24歳）（一八九六年）

「たけくらべ」『文芸倶楽部』に一括掲載。

結核のため死去（11・23）

奇蹟の十四か月

明 27（22歳）

小説創作に専念する決意。

「大つごもり」『文学界』（12）

明 28（23歳）

「たけくらべ」『文学界』連載開始

（1・30 ～ 29・1・30）

「軒もる月」『毎日新聞』（4・3 ～ 4）

「ゆく雲」『太陽』（5）

「うつせみ」『読売新聞』（8・27 ～ 31）

随筆「そぞろごと」（雨の夜、月の夜）

『読売新聞』（9・16）

「にじりえ」『文芸倶楽部』（9）

「十三夜」『文芸倶楽部』（12）

随筆「そぞろごと」（雁がね、虫の音）

『読売新聞』（10・14）

明 29（24歳）

「わかれ道」『国民之友』（1）

『たけくらべ』

樋口一葉

(一)

廻れば大門の見返り柳いと長けれど、
お齒ぐろ溝に燈火うつる三階の騒ぎ
も手に取る如く、明けくれなしの車
の行來にはかり知られぬ全盛をうら
なひて、大音寺前と名は佛くさけれ
ど、さりとは陽氣の町と住みたる人
の申き、三島神社の角をまがりてよ
り是れぞと見ゆる大廈もなく、かた
ぶく軒端の十軒長屋二十軒長屋、商
ひはかつふつ利かぬ處とて半さした
る雨戸の外に、あやしき形に紙を切
りなして、胡粉ぬりくり彩色のある
田樂みるやう、裏にはりたる串のさ
まもをかし、一軒ならず二軒ならず、
朝日に干して夕日に仕舞ふ手當こと
ぐしく、一家内これにかかりて夫
れは何ぞと問ふに、知らずや霜月酉
の日例の神社に欲深様のかつぎ給ふ
是れぞ熊手の下ごしらへといふ、正
月門松とりすするよりかゝりて、一
年うち通しの夫れは誠の商賣人、片
手わ

(明治28年1月、明治29年1月)

(2) 魅力の作品世界

「一葉」

『青年文』明治29年2月10日

花圃は夕月夜に櫻の散りかゝるに似たり、華やかなれども静かなる趣あり。

若松賤子は苔むせる巖間に湧き返る眞清水の如し、氣味よく涼し氣なり。小金井きみ子は桔梗の一本やさしけれども氣高き所あり。

而して一葉は風の吹あるゝ中を落ち残りたる三日月にも似て、あはれなれどもつよみあり。

四閨秀いづれはあれど、吾は最も一葉を推す。(中略)花圃女史を以てす

るも、其想に至ては一葉に一步を譲らざるを得ざるべし。

①『たけくらべ』

子どもたちから透けて見える

大人たちの世界

* 大黒屋の美登利

姉が大黒屋の花魁大巻

両親

大黒屋の主

* 龍華寺の信如（藤本信如）

父が龍華寺の住職

姉の花 葉茶屋

* 田中屋の正太

貸金業

* 長吉（子供大将、頭の長）

とび人足の親方

* 三五郎

龍華寺は地主、長吉は家主、

田中屋は金主

大黒屋の美登利

生國は紀州、言葉のいさゝか訛れるも可愛く、第一は切れ離れよき氣象を喜ばぬ人なし、

子供に似合ぬ銀貨入れの重きも道理、姉なる人が全盛の餘波、延いては遣手新造が姉への世辭にも、美しいやん人形をお買ひなされ、これはほんの手鞠代と、呉れるに恩を着せねば貰ふ身の有がたくも覺えず、

末は何となる身ぞ、兩親ありながら大目に見てあらき詞をかけたる事も無く、樓の主が大切がる様子も怪しきに、聞けば養女にもあらず親戚にてはもとより無く、姉なる人が身賣りの當時、鑑定に來たりし樓の主が誘ひにまかせ、この地に活計もとむとて親子三人が旅衣、たち出しは此譯、

姉：・大黒屋の花魁大卷

兩親：・大黒屋に娘達を売り、働く。

樓の主：・吉原の大黒屋の主人

龍華寺の信如

いそがしきは大和尚、貸金の取たて、店
への見廻り、法用のあれこれ、月の幾
日は説教日の定めもあり帳面くるや
ら經よむやら斯くては身軀のつゞき難し
と夕暮れの縁先に花むしろを敷かせ、片肌
ぬぎに團扇づかひしながら大盃に泡盛をな
み／＼と注がせて、さかなは好物の蒲焼を
表町のむさし屋へあらい處をとの詔へ、

姉の花……葉茶屋

父親の和尚……朝念佛に夕勘定

母親の御新造……霜月の酉には門前

の明地に簪の店

信如……斯かる事どもいかにも心ぐ

るしく、（中略）我親ながら浅
ましく

「三人冗語」森鷗外

われは作者が捕へ来りたる原材料とその現じ出したる詩趣とを較べ見て、此人の筆の下には、灰を撒きて花を開かする手段あるを知り得たり。

われは縦令世の人に一葉崇拜の嘲を受けんまでも、此人にまことの詩人といふ称をおくことを惜まざるなり。

②『にぶりえ』

明治28年（一八九五）9月「文芸倶楽部」に掲載。

樋口一葉の出世作。

発表されるや、高い評価を得て注目された。新開地の銘酒屋「菊の井」の酌婦お力を通して、下層社会に生きる人々の苦悩を写實的に描く。『たけくらべ』と並ぶ代表作である。

一葉作品の中で、ユニークであり、問題作である。

「すむ（澄む）」ことのない不条理な世界／濁った世界

主人公のお力は、「思ふ事」が多く、何かを実現させたいと考えているようであるが、何を思い、何を苦悩し、どうしたいのかが謎である。この苦悩する主人公が描かれた点、近代小説たり得ているところであるが、その主人公が女性であることも注目される。

最後に迎える「死」も、事情がはつきりとはわからない。

それらの謎が、多くの人々を惹きつける魅力ともなっている。

登場人物

* お力 銘酒屋「菊の井」の酌婦。売れっ子。

* 結城朝之助 お力の新しい客。裕福

* 蒲団屋の源七 お力に入れあげて、破産。
お力が忘れられず、心中自殺。

* 源七の妻お初 内職で家計を補助。
夫がお力のために財産をなくし、
今も忘れられない様子に心を
痛めている。子どもを抱えて困
窮している。
身寄りがないので、夫が頼り。

* 源七の息子太吉

* お高 銘酒屋菊の井の酌婦、お力の朋輩

お力

(二)私だとして人間でござんすほどに、

(三)よもや私が何をおもふか夫れこそはお分りに成りますまい

(五)お力は一散に家を出て、行かれる物なら此まゝ唐天竺の果までも行つて仕舞たい、

あゝ嫌だ嫌だ嫌だ、何うしたなら人の聲も聞えない物の音もしない、静かな、静かな、自分の心も何もぼうつとして物思ひのない處へ行かれるであらう、つまらぬ、くだらぬ、面白くない、情ない悲しい心細い中に、何時まで私は止められて居るのかしら、これが一生か、一生がこれか、あゝ嫌だ／＼と道端の立木へ夢中に寄かゝつて暫時そこに立どまれば、(中略)仕方がない矢張り私も丸木橋をば渡らずはなるまい、

(六)寧九尺二間でも極まつた良人といふに添うて身を固めようと考へる事もござんすけれど、夫れが私は出来ませぬ、

此様な厄種を女房にと言つて下さる方もある、持たれたら嬉しいか、添うたら本望か、夫れが私は分りませぬ

お初

(四)女房はお初といひて二十八か九にもなるべし、貧にやつれたれば七つも年の多く見えて、お齒黒はまだらに生へ次第の眉毛みるかげもなく、洗ひざらしの鳴海の浴衣を前と後を切りかへて膝のあたりは目立ぬやうに小針のつぎ當、狭帶きりゝと締めて蟬表の内職、脇目もふらぬ様あはれなり。

妻は悲しさうな眼をしてお前さん又例のが起りましたらう、それは菊の井の鉢肴は甘くもありましたらうけれど今の身分で思ひ出した處が何となりまする、先は賣物買物お金さへ出来たら昔しのやうに可愛がつても呉れませう、(中略)お前さんが未練でござんす、お前に弱られては私も此子も何うする事もならで、夫こそ路頭に迷はねばなりません。

(七)お初は口惜しく悲しく情なく、口も利かれぬほど込上る涕を吞込んで、これは私が悪う御座んした、堪忍をして下され、

決してお力の事につきて此後とやかく言ひませず、蔭の噂しますまい故離縁だけは堪忍して下され、

離縁されての行き處とてはありませぬ、何うぞ堪忍して置いて下され、私は憎くかろうと此子に免じて置いて下され、謝りますとて手を突いて泣けども

『十二夜』

* お関

* 夫・原田勇……奏任官

* 子・太郎

* 父・斎藤主計

* 母

* 弟・亥之助

* 高坂録之助……車夫

煙草屋を廃業

母は姉の元へ

妻子は実家へ

（上）

私は今宵限り原田へ歸らぬ決心で

て参つたので御座ります、

勇が許しで参つたのではなく、彼の子を寐かして、太郎を寐かしつけて、（中略）私は鬼に成つて出て参りました、御父様、御母様、察して下さいませ（中略）二年も三年も泣盡して今日といふ今日どうしても離縁を貰ふて頂かうと決心の臍をかためました、

何うぞ御願ひで御座ります離縁の状を取つて下され、

私はこれから内職なり何なりして亥之助が片腕にもなられるやう心がけますほどこに、一生一人で置いて下さりませとわつと聲たてるを嚙しめる襦袢の袖、墨繪の竹も紫竹の色にや出ると哀れなり。

お関の理由①

・物言ふは用事のある時慳貧に申つけられるばかり、

・朝飯あがる時から小言は絶えず、召使の前にて散々と私が身の不器用不作法を御並べなされ、

・二言目には教育のない身、教育のない身と御蔑みなさる、（華族女學校、お花、お茶、歌、畫）

・出來ずは人知れず習はせて下さつても濟むべき筈

・何も表向き實家の惡るいを風聽なされて、召使ひの婢女どもに顔の見られるやうな事なさらずとも宜かりさうなもの、

・全くは私に御飽きなされたので此様もしたら出てゆくか、彼様もしたら離縁をと言ひ出すかと苦めて苦めて苦め抜くので御座りましょ

・家の内の楽しくないは妻が仕方が惡るいからだと仰しやる、夫れも何ういふ事が悪い、此處が面白くないと言ひ聞かして下さる様ならば宜けれど、

お関の理由②

・一筋に詰らぬくだらぬ、解らぬ奴、とても相談の相手にはならぬの、いはゞ太郎の乳母として置いて遣はすのと嘲つて仰しやる斗、

・ほんに良人といふではなく彼の御方は鬼で御座りまする、

・何うでも御詞に異背せず唯々と御小言を聞いて居りますれば、張も意氣地もない愚うたらの奴、それからして氣に入らぬと仰しやりまする、

・良人は一昨日より家へとは歸られませぬ、五日六日と家を明けるは平常の事、

・出際に召物の揃へかたが悪いとて如何ほど詫びても聞入れがなく、其品をば脱いで擲きつけて、御自身洋服にめしかへて、吁、私位不仕合の人間はあるまい、御前のやうな妻を持つたのはと言ひ捨てに出て御出で遊しました、

・一年三百六十五日物いふ事も無く、稀々言はれるは此様な情ない詞をかけられて、夫れでも原田の妻と言はれたいか、太郎の母で候と顔おし拭つて居る心か、我身ながら我身の辛棒がわかりませぬ

父親の説得

愁らからうとも一つは親の爲弟の爲、太郎といふ子もあるものを今日までの辛棒がなるほどならば、是れから後とて出来ぬ事はあるまじ、離縁を取つて出たが宜いか、太郎は原田のもの、其方は齊藤の娘、一度縁が切れては二度と顔見にゆく事もなるまじ、同じく不運に泣くほどならば原田の妻で大泣きに泣け、な關さうでは無いか、合點がいつたら何事も胸に納めて知らぬ顔に今夜は歸つて、今まで通りつゝしんで世を送つて呉れ、お前が口に出さんととても親も察する弟も察する、涙は各自に分て泣かうぞと因果を含めてこれも目を拭ふに

お関の翻意

阿關はわつと泣いて夫れでは離縁をといふたも我まゝで御座りました、成程太郎に別れて顔も見られぬ様にならば此世に居たとて甲斐もないものを、唯目の前の苦をのがれたとて何うなる物で御座んせう、ほんに私さへ死んだ氣になれば三方四方波風たゝず、(中略)今宵限り關はなくなつて魂一つが彼の子の身を守るのと思ひますれば良人のつらく當る位百年も辛棒出来さうな事、よく御言葉も合點が行きました

（下）

* 録之助との再会

奥様にお成りなされたと聞いた時から夫でも一度は拜む事が出来るか、一生の内に又お言葉を交はす事が出来るかと夢のやうに願ふて居ました、今日までは入用のない命と捨て物に取あつかふて居ましたけれど命があればこそその御對面、あゝ宜く私を高坂の録之助と覺えて居て下さりました、辱なう御座りますと下を向くに

* 阿閔の恋

私は此人に思はれて、十二の年より十七まで明暮れ顔を合せる毎に行々は彼の店の彼處へ座つて、新聞見ながら商ひするのと思ふても居たれど、量らぬ人に縁の定まりて、親々の言ふ事なれば何の異存を入られやう、烟草屋の録さんにはと思へど夫れはほんの子供ごろ、先方からも口へ出して言ふた事はなし、此方は猶さら、これは取とまらぬ夢の様な戀なるを、思ひ切つて仕舞へ、思ひ切つて仕舞へ、あきらめて仕舞うと心を定めて、今の原田へ嫁入りの事には成つたれど、其際までも涙がこぼれて忘れかねた人、私が思ふほど此人も思ふて、夫れ故の身の破滅かも知れぬ物を

「一葉」

『青年文』明治29年2月10日

一葉はよく此絶望の人物を捉へ、これが性行を描くに當りて、これにそゞぐに溢るゝの同情と、湧くが如きの熱涙を以てす。その『濁江』の、お力を見ずや、『十三夜』の高阪録之助を見ずや、『別れ道』のお京を見ずや、いづれも人生に絶望し、世をすね世を背きたるものにあらずや、而かもいづれも涙多く情ふかき感情の人に非ずや。

女史が一閨秀として此くまでの伎倆あるを歎賞するを禁ずる能はず。女史が筆を執れるや既に久しかるべしと雖も、女史が一年間に於ける進歩を見ば、誰か一驚を喫せざらむや

その『たけ競べ』に於て、初めて女史の筆のよく圓熟し、想も亦奇峭にして、凡庸作家の亜流にあらざるべきを見たり。

其觀察の肺腑に徹し、其やさしき同情の溢るゝ、洵に有望の作家たる哉。

「奇蹟の十四か月」へ

道徳すたれて人情かミの如くうすく朝野の
人士私利をこれ事として国是の道を講す
るものなく**世はいかさまにならんとすらん**
かひなき女子の何事を思ひ立たりとも
及ふましきをしれとわれは一日の安きを
むさほりて百世の憂を念とせさるものな
らす かすか成といへとも人の一心を備へ
たるものか我身一代の諸欲を残りなくこ
れになけ入れて死生いとはす天地の法に
したかひて働かんとする時大丈夫も愚人
も男も女も何のけちめか有るへき 笑ふも
のハ笑へ そしるものハそしれわが心はすて
に天地とひとつに成ぬ

**わかこゝろさしは国家の大本に
あり**

（「塵中日記」明治二十七年三月）

かれも人也馬車にて大路に豪奢をきそふ人あり

これも人也タくれの門にゆきゝを招きて情をうるの身あり

かれを貴也といふしるへからす 一これを賤しといふしるへからす

天地は私なし 萬物おの／＼所に随ひておひ立ちぬへきを何者そはかなき階級を作りて貴賤といふ

娼婦に誠あり 貴公子にしてこれをたはからむハ罪ならずや

良家の夫人にしてつまを偽る人少からぬにこれをはうき世のならひとゆるして一人娼婦斗せめをうくるハ何ゆゑのあやまりならん

（感想聞書 8 残簡 その二 明 27・秋）

我れ筆とるといふ名ある上はいかて
大方のよの人のこと一たび読ミされは
屑籠に投げいらるゝものハ得かくまし
人情浮薄にて今日喜はるゝもの明日
は捨らるゝのよといへとも真情に訴え
真情をうつさは一葉の戯著といふと
もなとかは値のあらさるへき

（「森のした艸 一」、明25・春）

1. 貧困をなくそう
2. 質の高い教育をみんなに
3. ジェンダー平等を実現しよう
4. 人や国の不平等をなくそう